篠原道生展

会場 ： 足利市立美術館

会期 : 2017 年 8 月 5 日 – 10 月 22 日

主催 ： 足利市立美術館

協力 ： （公財）足利市緑と文化・スポーツ財団・東武鉄道（株）

篠原道生展 – 終わりのない絵画

篠原道生（1960-92）栃木県足利市に生まれました。4歳まで同市月谷町で過ごし、7 歳の時港区北青山の大東塾へ移りました。中学卒業後、親元を離れ青梅市の大東農場で生活します。農場に近い青梅東高校に進学、牛の世話を済ませてから登校しました。教師から美術の道へ勧められ、81 年多摩美術大学油画専攻に入学、同大学大学院にまで進み、87 年修了しました。同年イタリアに4か月間滞在し、帰国後、画家になることを決心しました。アルバイトをしつつ制作に没頭しますが、92 年 12 月10日早朝、自ら命を絶ちました。

篠原道生の作品を特徴付けるのは青と赤です。澄みきった天上的な青と激情にたぎる血潮のような赤がせめぎあっています。そのあわいに無垢な少年、少女が所在なく止まっています。彼らは篠原の分身と思われますが、画家は別の姿として画面に登場します。それは「腕」です。青と赤のせめぎあいのなかに突如として現れ画面を横切っています。そして描かれた人物の魂をかすめ取るかのように伸びています。これは不吉なイメージです。明らかに画家は人ではない見地に立って画面を支配しています。それは「天使」かもしれません。篠原の手記を次に引用します。

僕も天使になり天使になり（現在をすてて）天使を捨てて/人間になりたいのさ　血の味を知り色彩を知り　全てを知りたいのさ　三つ目のことさ　（1988 年ごろの手記）

人が「天使」になるということはとても危険なことと思われます。この世の存在でありながら天なるものになるからです。天上高く上がったものは常に堕落の危機が伴います。危機をさけるには「天使」としての「生き方」を捨てなくてはなりません。それは地上の諸々の事柄と折り合いをつけ、生活者となることでしょう。ただ彼はこの世になじむことが苦手だったのかもしれません。彼の手記を読んでいるとある種の生きづらさを感じます。

しかし、篠原は堕落の危機を回避するために「天使を捨て」たいと思ったのではないことは確かです。「血の味を知り色彩を知り　すべてを知りたい」ために「人間」になりたかったのです。それが「三つ目のこと」だと言っています。「三つ目」とは何を意味しているのでしょうか。一つ目と二つ目

ははっきりとは分かりません。「天使」としての自分や無垢な少年としての自分、あるいは生活者としての自分がかかわっていると思います。

一方、「三つ目」とは「天使」と「人間」を循環するものとして生きることと考えてほぼ間違いないのではないでしょうか。これは「天使」であることよりさらに危険なことと思われます。「天使」ならば堕落しないように高みにとどまっていれば良いわけですが、「天使」と「人間」との往還は、常に堕落の危険と隣り合わせです。あるいは往還の方法が堕落しなかったら、それは大変厳しい選択だと言わざるを得ません。しかし、篠原は進んで「堕落」を選んだ節があります。それは「血の味を知る」という言葉に現れています。「血の味」とは現実世界での痛みのことではないでしょうか。落差があればあるほど痛みは激越なものになります。一方、この危険を避けるための手立ても彼は考えていました。それは「球」となることです。「人は三つ目の扉をたたくときに球となる」と篠原は述べます。

この「球」とは何を示しているのでしょうか。彼は「三つ目のとびらに白痴の愛」という言葉を遺しています。これは一種の狂気だと思います。狂気な状態に身を置くことにより、己を支えようとしています。球とは狂気の謂でしょう。いずれにせよ篠原は「三つ目の扉」を開きます。篠原がこの扉を自覚したのは手記が書かれた 1990 年頃だと思われます。この時期より彼の作品は独自の展開を示しました。オダリスクの夢も、それぞれの遊びも、自身の手を燃やす詩人もすべて「三つめの扉」の向こう側の出来事として、とらえられます、そして、ますます青と赤のせめぎあいは熾烈なものとなっていきます。それは二つの世界一天上界と現世の落差による痛みを体験したことによります。

それにしても篠原の青のなんとすがすがしいことでしょう。魂が洗われる思いがします。彼自身も己の「青」のなかに身を浸し、浄められたことでしょう。彼は「鈴の音は高く青く/その目玉の底にうつるもの/天上より落ちてきたのか」という美しい詩句をうたっています。清く、高く、懐かしい天からの鈴の音です。しかし、それはつかの間のことであり、濁りは絶えず生じます。それは血潮の赤との干渉によって起こりました。

青の中にも赤があり、赤の中にも青が混じります。この矛盾を一気に解消すべく腕が現れます。腕は少年と少女を譲るようにも、連れ去るようにも見えます。あるいは連れ去ることが護ることなのかもしれません。もしそうだとすれば、死もまた護りの働きを帯びます。描くということは、彼にとって小さな「死」の体験だったのかもしれません。それは描き続けることによって本当の「死」を回避する手立てでもありました。彼は「終わりのない絵画」を目指しました。しかし、死は彼を本当に連れ去ってしまいました。

こうしてみると「三つ目のこと」とは画家としての生き方に他ならないことが分かります。画家は天上界にも地上にも棲み得るのです。また、そうでなくてなりません。篠原の場合、二つの世界の落差の激しさを制作のモチーフとしたために、かなりの危険を強いることになりました。また問題解決の性急さも災いしたのかもしれません。しかし、彼の純度の高さは、画家としての燃焼度の高さとなって、激越さを秘めた静かな作品がこの世界にもたらされました。

僕はおくびょうなのだ
僕の自身の扉や壁や床を
広げないままに、生きている
広げようと感じながらも
まだそこに居るのはボクなのだ

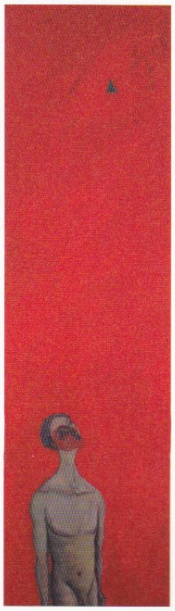
1987年12月5日

18 女、赤い木　1987年　水彩、インク・紙

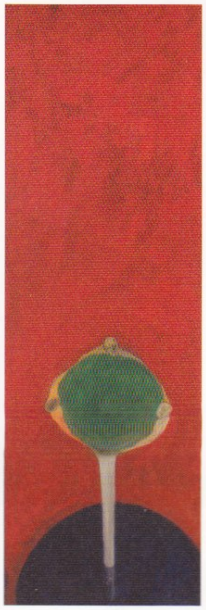
27 無題　1987年　アクリル・紙

体中の光は　くちびるを
カラカラにさせる

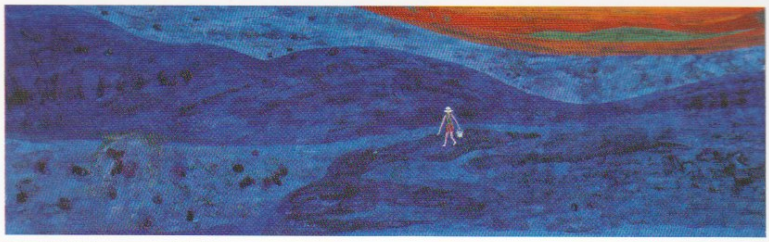
1990年1月10日



34 三角形をみつめて　1989年　油彩・キャンバス



36 無題　1989年　油彩、アクリル・紙



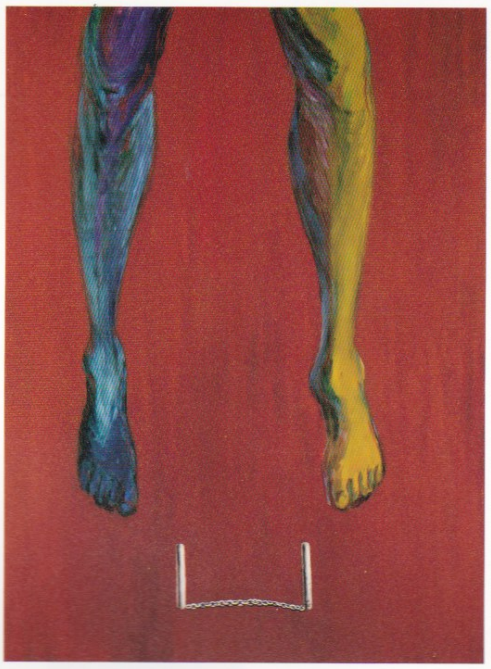
38 （潮干狩） 1989年　水彩・紙

鈴の音は高く青く
その目玉の底にうつるもの
天上より落ちてきたのか

1989年6月2日

体の内側より大きい夢が
やってくる
重たるく苦しいモノ
そこを越えたならば
聞こえてくるのか
詩えるのか
信じれるのか

1989年7月2日



40 青き者からの詩　1989年　油彩・キャンバス

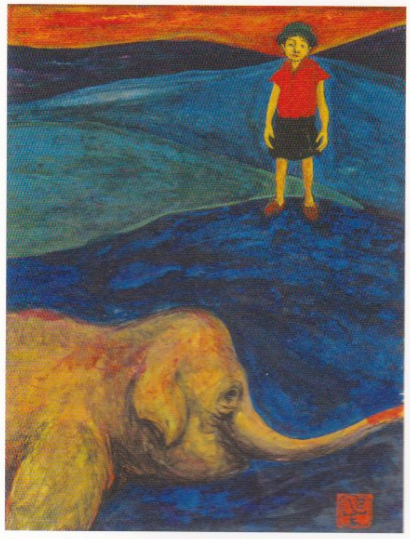
41 青き者からの詩　1989年　油彩・キャンバス

いい絵をかかせてください
いい絵を描かせて下さい

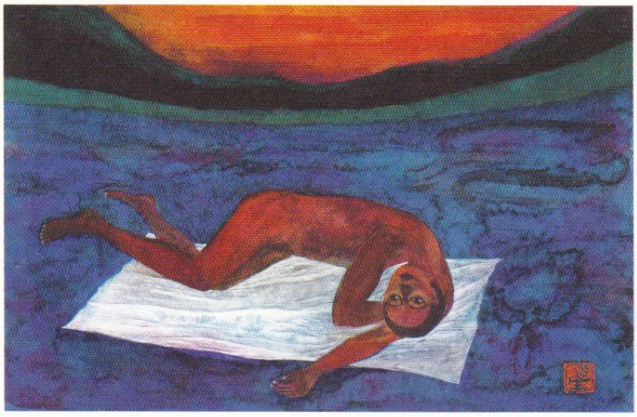
1990年11月2日

42 街・水・木・者　1989年　ミクストメディア・紙

43 三角の岩の帽子をかぶった男　1989年　油彩・キャンバス



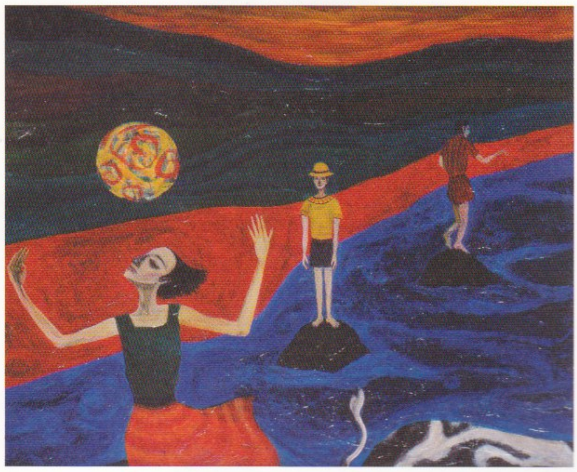
44 かしげた首まわして朝の散歩　1989年　水彩・紙



53 真新しいシーツで見るオダリスクの夢　1990年　水彩・紙

真新しいシーツでみる
オダリスクの夢
これは美術ではない
これは絵画ではない
絵だ―
正視できるか
三つめのとびらに
白痴の愛

記述年月日不詳

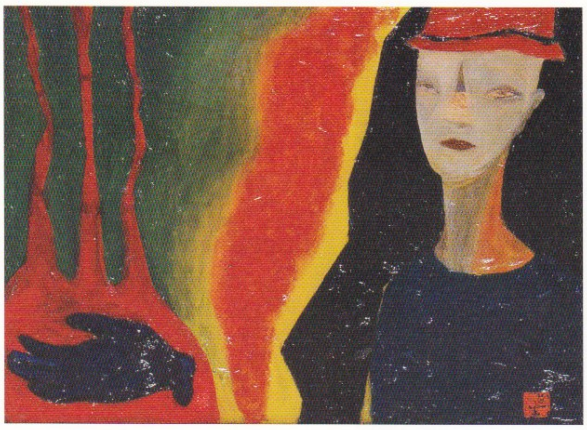


54 それぞれの遊び場　1990年　油彩・キャンバス

「生き　くるう」
を
『生くる』と
いうのですよ

1990年7月11日

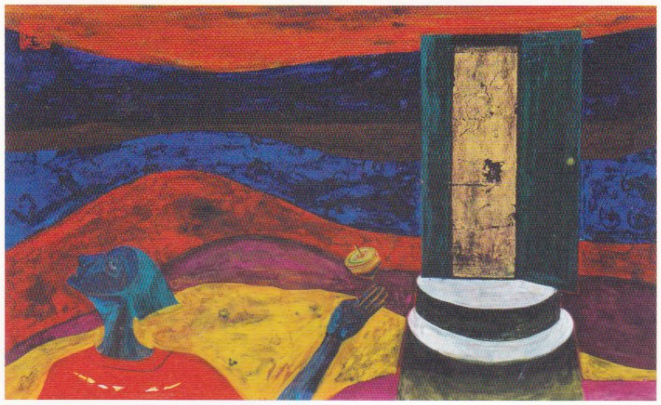
55 （街・少年）1990年　水彩・紙



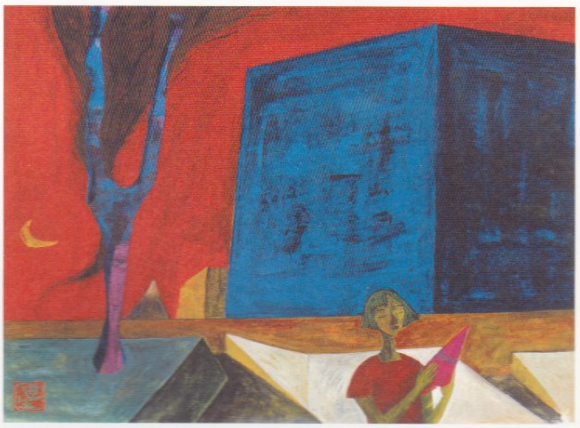
60 はじめの詩　1990年　油彩・キャンバス

体から体がぬげる夜

1990年8月21日



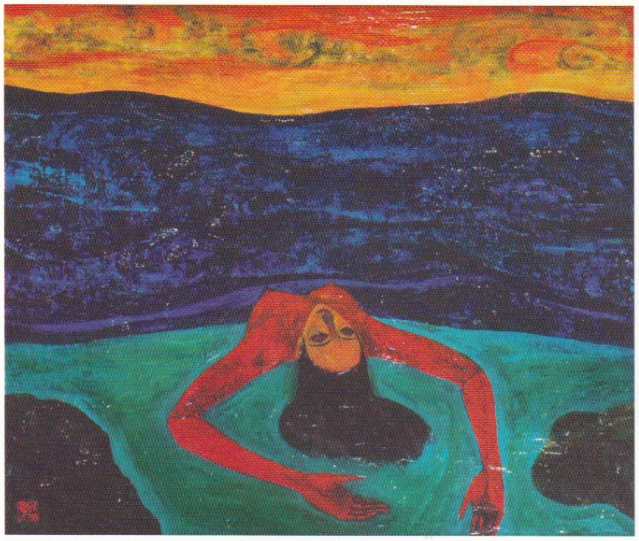
57 緑の扉の前に　1990年　水彩・紙



56 〈街・少女〉 1990年　水彩・紙

斜むいた耳は
黒い足音をきく
自動的落下あるいは
自動的昇天に
目まぐるしいピアノの指

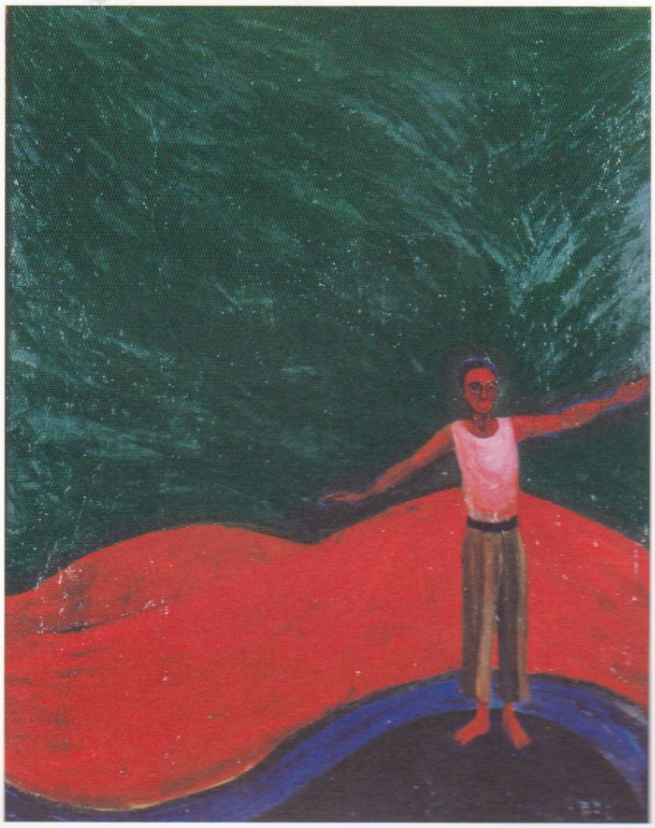
1989年10月5日



61　泳いだ海のつかれ　1990年　油彩・キャンバス

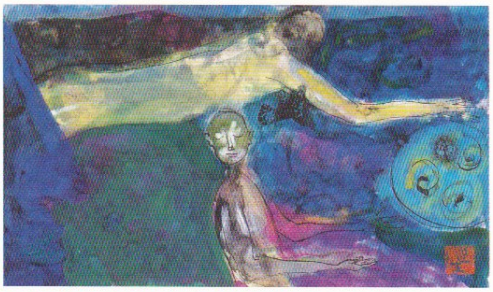
終わりのない絵画
漂々としてのみ

1991年8月21日



62　人は何故に立ち生まれ生くるのか　1990年　油彩・キャンバス

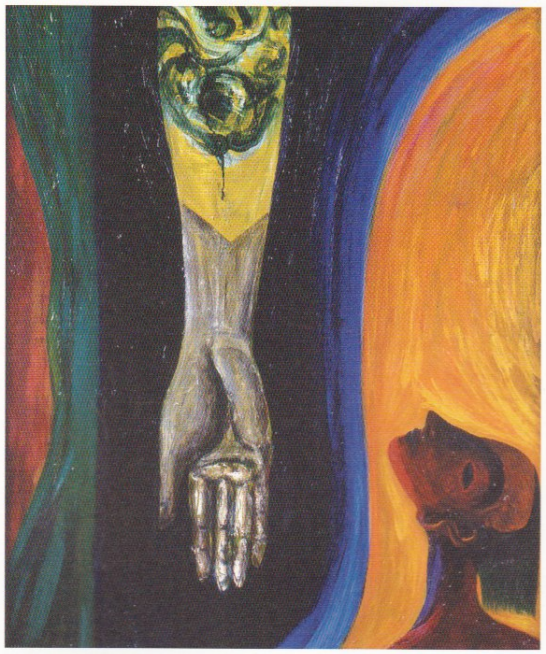
64 こんなに大きな自由の前で　1990年　水彩・紙



63 長い一日のたわむれ　1990年　水彩、インク・紙

まだ私は　白痴の　ことを
自覚しています

1990年11月2日



70 三つめの扉の前に白痴の愛を　1990年　油彩・キャンバス

人は二つの扉を
両手にもってる
ときがいちばんかも
人は三つめの扉をたたく
ときに球になる

1990年10月11日

75 春の雪　1991年　油彩・キャンバス

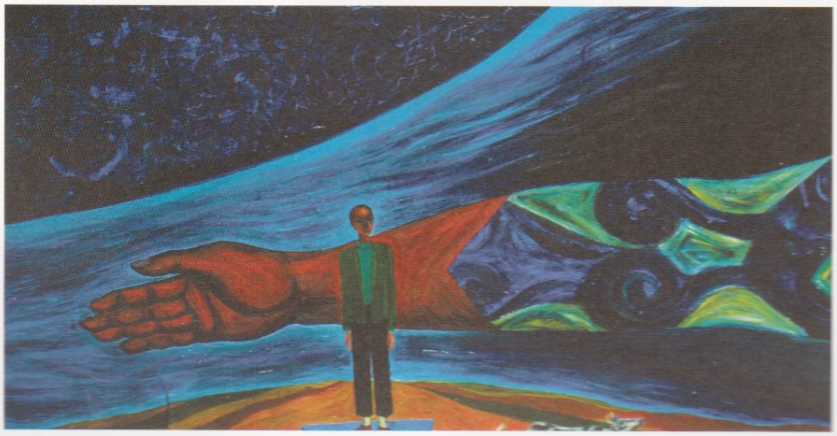
私は　絵を描いてしか
身をたてられません
私は　絵を描いてしか
身をよこたえられません
何もならなかった　空のために
それもウソ
それも真
絵を描くことだけなのです

1991年2月21日

76　少年と少女がみたもの（少年と少女の遠い記憶）　1991年　水彩・紙

とどいた腕の中か
のびきった腕の外か
それはあとかたもなく消える
上りあがる霧のうえ
ときおりにおれまがる枝
ふる　ふる　ふる
ゆられとゆれて
風の友だちだと
キレイナヒトハイウ

1990年8月3日



78　青い地球をみつめて　1991年　油彩・キャンバス

79 B氏の結婚　1991年　水彩・紙

命の花の君や
生れかわりし
時
会いたや

1992年11月7日

97 題不詳（絶筆）　1992年　木炭・キャンバス